

中途視覚障害者の白杖利用プロセスと分岐要因 —ライフコースにおける「重要な他者」に注目して—

Divergence on the Use of White Cane among Adventitiously Blinded Persons :focusing on the “significant other” in their life courses

坪田光平, 安房竜矢, 駿河厚希

Tsubota Kohei, Awa Tatsuya, Suruga Koki

The purpose of this paper is to clarify the process of how adventitiously blinded persons take it granted for using white cane through the effect of significant others using interview as a method. Based on the life-story approach, it is found that adventitiously blinded persons have chances of attaining disability acceptance by through of encountering a significant other. Analyzing the effects of significant others, it's also found that the effects are mainly consist of two functions; person-oriented and group-oriented support. As result, person-oriented support provided by the same blinded community has a strong effect on the use of white cane by through of the choices of assimilation or disassimilation for the community, which makes a divergence on the process of using white cane.

Keyword: White Cane, Adventitiously Blinded Person, Significant Others

1. 問題の所在

本稿の目的は、「白杖利用にあたって中途視覚障害者がどのような他者に影響を受けたのか（＝重要な他者からの影響）」を明らかにすることを通じて、視覚障害者の理解と支援のあり方を考察することである。本節ではまず先に、中途視覚障害者に着目する背景と意義を説明しておくことから始めよう。

日本における視覚障害者について報告した『平成 23 年度生活のしづらさなどに関する調査』によれば、日本にはおよそ 31 万 5000 人の視覚障害者が存在することが明らかにされている。視覚障害者には少なくとも、先天的ないし後天的要因が関わっており、近年では糖尿病といった成人病の影響等によって中高年齢層の中途視覚障害者の割合の高さが顕著である。また、視覚障害者の見え方は「全盲」と「弱視」に大別され、視覚障害者となる「時期」だけでなく「視機能」についても当事者の実態は多様であり、視覚障害者をめぐる議論には内部の多様性に注意を払った検討が求められている。そのことは、本稿が注目する白杖利用との関連においても同様である。しかし一般に、すべての視覚障害者は「つえ（以下、白杖）」を利用することが道路交通法で規定されている。同法第 14 条は、「目が見えない者（目が見えない者に準ずる者を含む。以下同じ。）は、道路を通行するときは、政令で定めるつえを携え、又は政令で定める盲導犬を連れていなければならない」と定めており、その色につい

ても「白または黄色」であることを条件として課している。なお、本研究が実施したインタビュー調査において「黄色」の杖を利用しているという回答者はいなかったため、本稿では「白杖」と呼称している。

視覚障害者内部の多様性に注意を払ったとき、注目すべきは「中途視覚障害者がすぐ白杖を利用できるとは限らない」ということである。日本盲人会連合によると、とくに中途視覚障害者の多くは「眼科で病名を告知され、その説明を受けて初めて、事態の重大さに驚き、予備知識などが無いため取るべき行動がわからず、途方にくれてしまうのが一般的^[1]」とされている。すなわち、白杖を利用する前にはそもそも「障害者になること・なったことを受容する（＝障害受容）」という心理的な問題が先行し、それと深く関わるかたちで教育や就労を含む自らの将来設計や生活全般にわたった再検討の必要性に迫られるのである。このことは無論、先天的な視覚障害者の課題が軽微であることを意味しない。しかし上記の点が中途視覚障害者の直面する固有の課題として挙げられていることを踏まえれば、さしあたり白杖利用のプロセスはまず障害受容のプロセスとして理解される必要があるだろう。

もちろん、白杖の利用それ自体は視覚障害者の日々の生活を円滑にしたり安全を保障したりするうえで非常に重要である。例えば白杖の機能面に注目した工学分野の様々な研究では、白杖の利便性向上や空間認知のあり方を探ることを通じて、電車利用時におけるホーム転落事

故を防止するといった安全配慮への志向性が見られたり^[2],あるいはバリアフリーの観点から点字ブロックや音声案内を含む「生きやすい」都市設計のあり方を模索したりする議論^[3]をリードしてきた。この文脈と整合するかたちで、視覚障害者にとって重要な補助具となる白杖は、医療機関において、全盲だけでなく弱視の視覚障害者に対しても積極的な利用が奨励されている^[4]。

このように白杖利用に注目することは、中途視覚障害者を理解することに結びつくだけでなく、広くバリアフリーの条件を問い直し、障害の有無にかかわらず、開かれた社会や当事者への支援のあり方を模索する重要な意義を有しているだろう。

2. 先行研究の検討と課題設定

視覚障害者を取り巻く環境面への改善が図られたとしても、視覚障害者が実際に白杖を利用できるとは限らない。とくに中途視覚障害者は、従来から健常者として社会生活を過ごしてきた経験や自負が確立されているほど喪失感の度合いは強いとされているのであり、引き裂かれたアイデンティティをどのように再構築していくかが白杖利用のプロセスを考察するうえでは注目される^[5]。すなわち白杖を利用するプロセスとは、当事者がまず「どのように視覚障害者であることを受け入れるか」が深く関わっているのである。もちろん、白杖利用は視覚障害者個人の心の問題に落とし込まれるものではない。そこには白杖利用に対する他者からの否定的なまなざしや言動も関わってくるのであり、白杖利用のプロセスには対人接触場面や視覚障害者に対する社会的イメージについても目を向ける必要がある。このため、いわゆる障害受容には個人の心理的側面だけでなく広く社会的相互作用の影響を加味した検討が肝要となっている^[6]。

その一方で、中途視覚障害者がどのように白杖を利用するかについては理論中心であり、体系的な実証研究を欠いてきたと批判される。例えば上田・津田^[7]は、体系的な研究の不在の背景には視覚障害者に対する心理学的サービスが、心理士・精神科医が特殊教育の中に出向いて行って短期間だけ行われ、あるいは小集団の特殊なプログラムにおいて行われてきたことに原因があると指摘する。無論、Caroli^[8]が指摘するように、視覚障害者は「20の(項目にわたる)喪失」を経験するとされている通り、中途視覚障害者に対する様々な支援の必要性は論を俟たない。しかし翻って日本における中途視覚障害者と白杖利用の関係を扱った先行研究は、専ら白杖利用に伴う心理的困難を析出する作業が中心となっている——例えば歩行訓練を拒否したり訓練を受けて白杖を入手したとしても実際の利用を拒否したりするといった事例である^[9]。こうしたなか、藤咲ら^[10]の研究では、中途視覚障害者が具体的にどのような心理的負担を抱えているのかを定量的に検討しており、中途視覚障害者に対する支援のあり方を模索する本稿に対して示唆的である。そこで本節では、既存研究を通じて得られた知見を整理すると

もに残された課題を示し、本稿で検討する点について明確にしよう。

争点となるのは、白杖利用に伴う心理的困難の構造である。定量的な検討を通じて示されたのは、様々な困難要因である。すなわち、①白杖利用を通じて「障害者扱いされることへの抵抗」、白杖に対する周囲からのまなざしとして、例えば一人前として扱われないといった②「誤解への不安」、そして障害受容と関係する要因として析出された、③「障害を知られる(ことへの)不安」である。これらの要因と並行して、④「周囲に迷惑をかけることへの不安」という要因も影響を与えることが明らかにされている。ここで問題は、どのようにこれらの要因が視覚障害者に見直されるのかということである。このプロセスには、例えば「周囲から声をかけてもらえる」、「人が避けて歩いてくれる」といったポジティブな側面への気づきが重要であるとされており、「白杖を利用することによって実感される効果(=効果の実感)」は当事者の白杖利用を促すポジティブな要因として注目されている。この見地から、白杖利用に関する知識提供や相談業務を通じてどのように「効果の実感」への気づきを促せるかという課題提起は、ロービジョンクリニック等を併設した一部の医療機関に中途視覚障害への啓蒙役割が限定されている現状に照らせば、確かに中途視覚障害者の白杖利用に資する重要な知見だといえるだろう。

一方で、視覚障害が情報の障害をもたらすように、「効果の実感」への気づきという課題克服の道筋は、十分に検討されていない。そこで本稿が目指したのは、そもそも白杖を利用しようと思える以前に「障害を受容する/できる心境」が繰り返し担保されることの必要性である。にわかには障害受容がなされないとするならば、そこにはむしろ、自分の人生に影響を与えたといった「重要な他者」^[11]の介入をはじめとする積極的な支援の影響とそれを通じた課題克服の道筋が多々見出せるはずである。ここからは、具体的にどのようにして白杖が利用されていたのかというプロセスに焦点を当てた研究の必要性が提起できる。そこで本稿では、「現在、白杖利用に抵抗を感じない」と回答する中途視覚障害者に焦点をあて、受障してから現在にいたるライフコースに注目しながら「どのような『重要な他者』が障害受容を促してきたのか」「それは白杖利用にどのように影響しているのか」を検討したい。以上から本稿では、二つのリサーチクエスチョンを設定して分析を行うことを作業課題とした。

1) 中途視覚障害はどのように障害を受容していったのか。とくに視覚障害や白杖の積極的な利用の契機となる「重要な他者」に注目して明らかにする。

2) 「重要な他者」は白杖の積極的な利用にどう結びついていったのか。とくに「重要な他者」がもつ支援機能の広がり注目して明らかにする。

結論を先取りして言えば、本稿で対象とした中途視覚障害者の多くは、中途失明によって様々な「喪失」を経験しながらも、白杖利用の開始前に「強い影響を受けた」と語る他者(=「重要な他者」との出会いとそこでの相

互行為を担保とすることによって「効果の実感」が達成されていったというのが本稿の仮説である。そこには、必ずしも医療機関へのアクセスに問題解決の方策が落とし込まれない、豊かな広がりが見受けられる。以下、次節では本稿が対象とするデータについて説明したうえで、上記二点の研究課題を検討していこう。

3. 研究方法とデータの概要

本稿では、中途視覚障害者 10 名に対して実施したインタビュー調査の結果(ゴシック体表記)を分析に用いる。

調査の実施にあたっては、まず「現時点で白杖利用にあたって抵抗感がない」という中途視覚障害者に対象を限定したうえで、条件に合致する調査対象者(インフォーマント)に雪だるま形式でアクセスしていった(2016 年 7~11 月)。またインフォーマントには、あらかじめ本研究の目的を説明してインタビュー許可を得るとともに倫理的配慮として調査同意書を読み上げ、同意を得たうえでインタビューを実施した。インタビュー項目は、年齢や家族構成といった対象者の基本属性に加え、受障の経緯と当時から現在にかけての将来展望の変化、白杖の具体的な利用の仕方、そして白杖や視覚障害者のイメージの変遷を中心に構成し、1 人につき 2 時間~3 時間程度にわたって半構造化インタビューを実施した。インタビュー内容は許可を得てすべて録音しており、分析にはスクリプト化したものを用いた。なお、本稿では個人が特定できないよう、倫理的配慮によってインタビュー内容には必要最低限の修正を加えていることを断っておく。

次にデータの概要について説明する。表 1 は、インタビュー対象者の基本属性を一覧にしたものである。ここからうかがえるのは、調査対象者が回答した「重要な他者」が様々に言及されていることである。本研究の結果からは、少なくとも①学校教師、②盲学校時代における教師や友人、③医療機関における医師・看護師、④訓練

指導員、そして、⑤職場の同僚・上司、がそれぞれ挙げられ、ライフコースにおける中途失明の「時期の違い」が関係していると整理できる。本稿ではこうして言及された「重要な他者」の機能を、ライフストーリー法をもとに追究することで、白杖利用が「当たり前」とみなされていく複数のプロセスを明らかにしていきたい。

以下、中途視覚障害者内部の多様性に注意を払うため、まずは中途失明の時期——「学齢期終了前」と「学齢期終了後」に着目し、調査対象者の障害受容プロセスにおける「重要な他者」の影響を描いていく(第 4 節)。次に、なぜ中途視覚障害者に白杖利用が積極的に支持されていたのかを、「重要な他者」が備えていた機能という視点から検討する(第 5 節)。そのことを通じて、中途視覚障害者に対する支援のあり方と今後の課題を考察していく。

4. 中途視覚障害者の障害受容における「重要な他者」

まず強調しておきたいのは、①学齢期を終えるまでに中途失明を経験した調査対象者と、②学齢期を終えてから中途失明を経験した調査対象者のいずれから、程度の差こそあれ「見えなくなってしまった」という喪失経験が共通して語られる傾向があるということである。

例えば、これまでに描いてきた将来展望が挫かれたり、社会人としての高い有能感が一気に喪失してしまったりするという「挫折」の語りを通じて鮮明になる。以下で示したいのは、こうした「挫折」を読み替えていく「重要な他者」の影響である。その存在は 1 名ではなく複数語られる傾向にあったが、本研究ではまず、中途失明を経験した初期段階に「喪失経験」を乗り越えられるトリガーとして語られた「重要な他者」の影響を描いていく。

4.1 学齢期終了前の中途失明経験と「重要な他者」

小中学校時代までに急激な視力低下を経験したのは

表 1 インタビュー対象者のプロフィール^[注 1]

仮名	性別	年代	学歴	初職	受障時期	受障経緯	区分	障害者手帳等級	重要な他者
Aさん	女	60代	大卒	訓練指導員	青年期	網膜色素変性症	全盲	1級	病院の医師
Bさん	男	50代	大卒	会社員	壮年期	網膜色素変性症	全盲	1級	職場の上司
Cさん	男	20代	大卒	会社員	青年期	網膜色素変性症	弱視	2級	訓練指導員
Dさん	男	30代	専門学校卒	自営業手伝い	青年期	網膜色素変性症	全盲	1級	職場の同僚
Eさん	男	60代	大学院卒	会社員	学齢期	緑内障	全盲	2級	盲学校の友人
Fさん	男	40代	大学院卒	学校教員	学齢期	網膜色素変性症	全盲	2級	訓練指導員
Gさん	男	60代	大卒	会社員	幼少期	はしか	全盲	1級	盲学校の教師
Hさん	男	60代	大卒	団体職員	学齢期	網膜剥離	全盲	1級	病院の看護師
Iさん	男	60代	高卒	整形外科	学齢期	網膜剥離、白内障 網膜色素変性症	全盲	2級	学校の教師
Jさん	男	20代	高卒	大学在学中	学齢期	レーベル病	全盲	1級	学校の教師

10名中4名であった。彼らは学齢期段階までに中途失明を経験することによって、それまで描いていた将来展望が挫かれ、進路選択を進学校から盲学校に変更するといった語りが顕著に見られた。

診断を受けたときには、視力の下がり方って、ただ視力が悪いとか、眼鏡をかけて視力が戻るようなものじゃないって何となく自分でも気づいていたので、どんな診断が出ても治らないんだろうなっていう。結構、うつ病状態に近くて。…（それまでは）地元の高校、進学校に進もうって思っていたんです。中3のときは目が悪くなって何も考えられない状態だったんで、このままだと高校行けないなって。診断を受けた時には、盲学校を勧められたんですけど、ここに行くんだらどこも行かなくていいかって当時は思っていました。憧れていた高校生活と全然違うなって。目が悪くなって、そこに進むってことになおさら気持ちが沈んでいきました。（2016年10月25日：Jさん）

ここで示されているのは、中途失明によってそれまで描いてきた将来展望が挫かれ、「うつ状態」として言及されるように、塞ぎ込みな中学校生活を送っていたという事実である。Jさんは、その事実を担任教師に伝えるものの当時の教師は「はずれだった」と言い、何ら特別なサポートを受け取ることなく学力試験では0点をとった事実を象徴的なエピソードとして語った。同じように、中学校3年で中途失明を経験したIさんも、将来就きたい仕事を諦めざるを得なかったと語り、中途失明という経験は改めて彼らのライフコースに強く影響を与えることが確認できる。

一方、彼らがその後「障害を受容できるようになった」と語る背景として強調したいのは、とくに中学校時代の恩師として言及される「教師」の存在である。Jさんは担任教師とは別に、学年主任の先生が非常に熱心に日々奔走しては彼の進学先候補となる盲学校の情報を調べてくれたり、地域に住む同じ中途視覚障害者を調べて直接引き合わせてくれたりしたという。またIさんについては、毎日交代で代わる代わる学校の友人が彼の自宅を訪れ、一緒に登校できるよう教師が手配してくれてもいたのである。ここで明らかなのは、中途失明を経験したことに伴う周囲の支援の結果として、彼らに良好な学校経験が築かれていったことである。そのことの意義は決して小さくなく、彼らはその後もこうした教師たちと連絡を取り合うなど、学校時代における教師との関係は生涯を通じたものへと価値づけられていたのである。そして、盲学校に進学した彼らは「白杖を持つことが当たり前」な環境に驚くと同時に、そうした環境に順応的な学校生活を送っていったと回答する。

彼ら2名が高校時代から盲学校へと進学していく一方で、徐々に幼少期から視力が低下していたために小学校時点で既に盲学校に通っていたと回答するのがGさんとEさんである。上述した2名とは反対に、両名とも「緩

やかに視力が低下していく」ことに一定の心構えができていたことを強調する。彼らによれば、急激な視力低下を経験した中途視覚障害者よりも「ショックに備えておくことができるから」だという。しかし、上述したJさんとIさんを含めて強調したいのは、「だからといって白杖を持つことには抵抗があった」という事実である。とくに「可能な限り目立ちたくない」という当時の心境を語ったEさんは、「障害者として見られることへの不安」があったと回答する。この意識は、既述のJさんやIさんにも共通していた。しかし、4名全員が強調するのは、こうした意識を退けるうえでは盲学校時代の教師や友人たちの影響が非常に大きかったということである。

同じような立場・状況の人間が集まっていれば、知恵を貸し合ったり勇気づけたり慰めあったり。言葉はちょっと綺麗ごとを感じるけど、お互いに切磋琢磨して克服するような、ああいう学校（＝盲学校）っていうのは僕は悪いと思いませんし、インクルーシブ教育ってそういう役割は誰が担うのかってその辺は疑問に思いますね。隔離が決していいいわけじゃないけど、そういうソサイエティ（＝社会）を持っているということは、とても重要じゃないかと思えますね。

（2016年9月15日：Eさん）

ここであらかじめ確認しておきたいのは、中途視覚障害者が同じ当事者と知り合うのは困難だという「機会の希薄さ」である。今回調査対象とした全員が、今後の視覚障害者の支援の方向性に、「自室に塞ぎ込みがちな視覚障害者をどう拾い上げるか」、「どのように既存の中途視覚障害者ネットワークに包摂していけるのか」を重要な課題として挙げていた。しかしそのことは、裏を返せば急激な視力低下を経験したとしても当事者同士のネットワークになかなかアクセスすることができないという「過酷」な現実を示している。Eさんが言及する視覚障害者の「ソサイエティ」は、同じ視覚障害者という当事者ネットワークの集合体として重要視され、同じ視覚障害者が集まるコミュニティに帰属することの意義は計り知れないとEさんは語った。

当事者コミュニティに帰属することによって得られる様々な恩恵は、学齢期を終えて中途失明を経験した調査対象者にも共通して言及されていた。またJさんやIさんは、そもそも盲学校に通うという選択肢を支えてくれた初期の「重要な他者」として学校の教師を挙げているものの、白杖利用という具体的な行為についてはGさんやEさんと同じ視覚障害者の存在が欠かせないという。家の近所で白杖を持っていることを見られることに不安や抵抗があったと表明していたJさんも、「白杖を使うことが当たり前」な盲学校に通うことで、その不安感は1ヶ月もしないうちに消えていったというのである。

4.2 学齢期終了後の中途失明経験と「重要な他者」

次に学齢期を終えて中途失明を経験した調査対象者を

検討していこう。該当するのは10名中6名であった。前項では学齢期中途失明であるがゆえに、教育機関（学校の教師や盲学校の友人）の「重要な他者」が回答されていた。しかし、学齢期終了後に中途失明を経験した調査対象者の語りは多様である。本研究から明らかになったのは、①医療機関（＝病院の医師・看護師：2名）、②就労支援機関（＝訓練指導員：2名）、そして③会社（＝職場の上司・同僚：2名）という三つの「重要な他者」の存在である。以下、その内容を検討していこう。

①医療機関（Aさん、Hさん）

該当するのはAさんとHさんである。ここで強調しておきたいのは、両名ともに医療機関の初期対応の良さを強調し、喪失経験をほとんど語ることなく非常にポジティブな障害受容のプロセスを見せたことである。

（病院の先生が）すごい丁寧にしてくださったの、行く度に。みんなそうすると、「絶望感」とかいうんですよ。同じ病気の人も見えてる時にゆくゆくみえなくなるだろうと、絶望感が（出てくるだろうって）。…じゃあ、見えるうちに色々なことをしとかなくちゃと思ひまして、眼科の先生も主治医も、今のうちにいい絵をみたり、旅行にいったり、ミュージカル見たり、出来る限りやった方がいいって言われて、そうかと思つて。目が悪くなるって言われなかったらここまで色々なことをしなかったかな。なので、徐々に見えない、見えないって思ったけど、目のこと考える暇なく旅行いったり、それこそ、いい絵を見たりとか海外旅行に行ったりとかしてたので…全然目が見えないということに関しては、あんまり無かったんですよ。…自分では見えないことが普通になっちゃって、だからすごい経験をたくさんさせてもらって、そこは自信があるくらい、負けないって。見えないからこそ経験できないこととか経験させてもらったりしました。

（2016年9月15日：Aさん）

上記のように、インタビュー中にAさんは、一般的に中途視覚障害者の特徴とされる「絶望感・喪失感」への疑義を繰り返して強調していた。そうした彼女の語りからは、「見えなくなる」という事実そのものを出発点にしつつ、医師との相談から様々な経験を積み重ねていこうとする積極的な価値の転換がはっきりと読み取れる。これまで触れたインタビュー対象者たちからは、将来展望が挫かれることによって抑うつを経験していたことが語られたが、Aさんからはこうした語りが見られなかった。むしろ彼女のライフストーリーは、大好きだったスポーツを全盲状態でも経験できないかと積極的に行動したり団体を組織したりと活発に行動し、成果をもぎ取ってきたという奮闘の経験によって構成されていた。その結果、高校・大学時代の友人が山ほどいるために、たとえ自分が困ったとしても、助力を乞えばすぐに周りが手助けしてくれるという「支援に満ちた状況」を提示していた。

もちろん、中途失明に伴う様々な苦痛や困難は確かにAさんも経験している。しかしここでは、医療機関との密なやり取りという「初期支援」の重要性に注目したい。つまり初期支援を通じて中途失明という事態は別様に価値づけられ、様々なネットワークを広げながら彼女の活発な行動を支えていったと指摘できるのである。

こうした語りのパターンは、医療機関を「重要な他者」として回答したHさんについても同様である。Hさんは、診断を受けた当時は「凄いショック」を受けていたというが、すぐさま点字学習と一緒に取り組んでくれた看護師の存在に感謝の意を表明している。高校に入ってからすぐ失明を経験したHさんはその後、盲学校に入学していくことになるが、入院生活で培った実に様々な人間関係に後押しされることで「白杖を使う」という選択が促され、彼にとって深刻だった中途失明という事実を相対化することにもつながっていったという。「障害受容だけでなく白杖利用にもほとんど時間はかからなかった」と堂々と切り切ってみせるAさんやHさんのこうした発言の背景には、Aさんと同様に医療機関を通じた初期支援とそこで展開される相互行為の重要性を示したものに相違ない。

②就労支援機関（Cさん、Fさん）

AさんとHさんが中途失明を経験したのは高校1年生時点である。一方、高校2年～3年生時点で中途失明を経験したのがCさんとFさんの2名である。彼らはともに診断された時点では「死にたい」と考えていたほど強い喪失経験に見舞われており、両者ともに高い学業成績を収めていた点で共通する。また、両者ともにはっきりとした将来展望を築き、そのために高校進学以降も学業努力に高い価値をおいていた点が特徴である。

現時点でほとんど全盲に近いCさんは、大学進学時点では軽度の弱視状態であり、時間が足りなかったとはいえない一般に混じってセンター試験を受け首都圏の大学に合格し、「親に迷惑をかけたくない」一心で単独移動している。またFさんも、大学受験には失敗したと語るものの、予備校への入学手続きを終えていたという。そうした彼らが出会ったのが、「訓練指導員」の存在である。

（大学受験のための）予備校に行きながら「自分の目はこれで終わりだろう」と思って地域の点字図書館っていうところに行って相談をして、そしたらその相談をしに行ったときに「指導員」がいたんですけど、「今この状態だったら間違いなく1年後にはそんな普通の文字が読める状態じゃないから、今から点字の勉強をしろ」って、「予備校なんか行ってる場合じゃないよ」って言われまして。それでこっちとしても予備校行くじゃないですか、どうしても勉強しないと受からないと思うから予備校行くわけですよ、朝。そしたら予備校の前でその先生が車で待っているわけですよ。「お前の行き先はここじゃないから、点字図書館だから！」って言われて点字図書館に拉致されて。それでこの白い杖持たされたんですよ。アイマスクして

ずっと歩行訓練の練習をして…

(2016年10月20日:Fさん)

Fさんが挙げる「訓練指導員」は、出会っていないければ間違いなく「人生は狂っていた」と断言するほど重要な存在だという。その後Fさんは、盲学校に通った後、現在は教師の道に進み、Cさんはスポーツ選手としての道を切り拓いている。こうした彼らに共通しているのは、受障時点で視覚障害者に対する否定的なイメージを形成していたことである。例えばCさんは、自分自身が抱いていた視覚障害者イメージを「ザ・盲人」として形容する。その意味は、自分の外見や身なりに気を使うことなく「ダサイ」格好をしている「典型的な視覚障害者」だといひ、Cさんは自分自身もそうした典型像に括られてしまうことに強い抵抗感を抱いていたという。そしてだからこそ、何よりも視覚障害者のシンボルともいえる白杖は敬遠すべきものと位置づけていたというのである。Cさんはインタビュー中、一般的に意識される視覚障害者イメージが「劣った存在」であり、「ダサくて」しかも「かわいそうな」存在であったというそれまでの認識を隠すことはなかった。そのため、服装や身なりが良くないという「典型的な視覚障害者」にはよく訂正すべきだという発言を会話の中に多々取り入れていったという。しかし、一面では「侮蔑」が込められたその発言の意味合いは、Cさんが大学4年次に出会った訓練指導員との接触によって大幅に変わるようになったという。

そうですね、こういう人もいるんだとか、そういう人ばかりじゃないんだみたいな、自分の中にあつたステレオタイプみたいなものが崩れていくプロセスみたいなのはあつたと思いますね。そういう人達と関わっていくことによって、もちろん、僕も障害者なんですけど、障害のある人もない人も変わらないんだなというところが段々分かってきたんだと思います。だから、障害があつても馬鹿野郎は馬鹿野郎ですし、変態は変態ですし、そういう人間らしい部分っていうんですか、凄く分かってきて同じなんだという理解が進んで、自分がその(=視覚障害者の)一部になることが違和感なくなってきたというか、…(そして)杖を自然に受け入れる人たちと接することによって、持っていることが当たり前っていう認識をもつように後押しされる場合はあると思います。逆にいうと元々(先天的に全盲で)杖を使っている子たちは(盲学校で)そういう人とばかり接しているのだから、最初から抵抗感がなくて当たり前なんだと思いますよね。杖に違和感を持つ人と知り合っていないので、でも(僕みたいに)そうじゃない人は杖に対して違和感を持つ人しかいないので、抵抗があつて然るべきなんですよね、その差は大きいと。(2016年10月31日:Cさん)

Cさんが通った就労支援機関には、彼が抱いていたステレオタイプを見事に裏切ってみせる刺激的な全盲者

(兼訓練指導員)との出会いがあつたといひ、それまで画一的に過ぎた自分自身の視覚障害者イメージが、狭く、非常に固定的なものであつたことを改めて問い直していったというのである。この点は、訓練指導員と出会い、その後に盲学校に在籍した経験をもつFさんについても同様である。つまり彼らは、「重要な他者」との出会いを通じて、従来のステレオタイプな視覚障害者イメージを見直すとともにポジティブなものとして再構築していったのである。それが、「こんな視覚障害者もいる」という多様性を帯びた認識へと変化していったことは上述した通りであるが、重要なのは、そうした固定的なイメージの再編が障害受容へとつながっていったということである。つまり「重要な他者」との接触は、これまで自分自身とは「切り離して考えたい」「遠ざけていたい」と考えていた視覚障害者像を刷新させるよう作用することで、彼らは多様な視覚障害者の一部として自分自身を位置づけ白杖利用を選択することができていったのである。

③会社(Bさん, Dさん)

最後のパターンは、いずれも一定の教育段階を終えて中途失明を経験した2名である。Bさんは40代という壮年期での中途失明、そしてDさんは専門学校終了前という青年期での中途失明経験者である。なおDさんに関してあらかじめ強調しておきたいのは、専門学校を終えたその後、彼は生活訓練を希望して盲学校に通っていたという事実である。その事実、これまで「学齢期終了前」の事例に挙げたパターンと類似しているものの、決定的な違いは「そこまで盲学校から強い影響を受けていない」と断言してみせていることである。むしろ、中途視覚障害が集まる職場の同僚たちから非常に影響を受けたことをDさんは語った。

盲学校っていうのは視覚障害の人を対象にした教育の場ですよ、ある意味商売でいったら視覚障害の人が社会生活できるように訓練をします。だけど、社会っていうのは見える人達がいる場にどう溶け込むかというのを教える場でもあると思います。団体行動を身に付ける場でもありますしね。私がやっている仕事っていうのはもちろん「社会」に溶け込むというのもあるんですけど、商売ですからお金が必要ですし、こういう言い方はあまり好きじゃないんですけど、視覚障害者が持っていて、見える人が持っていない能力に気づかせるということがある。そこはもうたくさんの視覚障害者がいますし、(今の職場では)みんなそれぞれがアンテナをはっている子達なんです。だから、色々な情報をそこから教えてもらいたいのが一番大きいかなと思います。(2016年11月28日:Dさん)

これまでの調査対象者の多くは、精神面での回復を図る当事者コミュニティの存在意義は非常に大きいとして、とりわけ盲学校に高い価値を与えていた。しかし学齢期を既に終えているDさんは、上記の通り、盲学校に高い

価値を与える調査対象者とはズレのある語りを示した。例えば先述した E さんは、同じ視覚障害者同士が集まる「ソサイエティ」そのものの意義を強調し同じ視覚障害者が集まって過ごすことの意義と必要性を語っていたのに対して、「健常者」との関わりが希薄な盲学校の場は無条件で帰属したり安住してしまったりすることには抵抗感があると D さんは強調するのである。このことは、D さんが言及した「社会」の意味合いを考察することによって、より鮮明になる。確かに一面では既存の視覚障害者ネットワークに組み込まれ、白杖利用へとつながっていったことに D さんは一定の意義を感じ取りながらも、しかし同じ社会人という共通の土俵で競い合うことになる「健常者」はそこから排除されているために、「健常者」との接点や関係構築にむしろ意識的な「『職場』の同僚」を重要な他者に挙げているのである。この点で D さんは、学齢期前後に盲学校を経験した他の調査対象者たちとは明確に異なり、視覚障害者でありながらもどのように当事者コミュニティから距離を取って活躍していけるかという差異の実践を模索していると指摘できる。インタビュー中、喪失経験を語ることもそのものが無価値に過ぎないといえるほど D さんはドライに割り切って見せていたが、そこには、確かに視覚障害者でありつつも様々な「健常者」と交渉しながら視覚障害者が対等に健常者と渡りあうスポーツ活動の啓蒙・普及活動を D さん自らが推し進めている背景が強く影響していた。この点は、スポーツ選手として活躍し「健常者」と同じ土俵で競い合いたいと考えている C さんとも共通する。

その一方で、壮年期に訪れた中途失明経験に固有の語りを見せているのが B さんである。B さんはそれまで、営業部門の第一線で活躍しており、中途失明を経験する前には管理職の地位まで昇りつめていた。途中、何度も「おかしいな」と気づいていながらも、しかし「もしかしたら疲れすぎているのかもしれない」という疑問から本格的な検診を受けることはなかったという B さんは、網膜色素変性症により 40 代で視力を喪失していた。そのときの喪失経験は以下のように言及される。

私その時までは営業部門の筆頭で活躍していたものですから。自分でいうのもあれなんですけど、管理職だったものですから。その時にもう営業ができなくなると、イコールもう失業かなっていうものがありましたからね。それでまずは、自分の職がどうなるのか、その心配が一番大きかったような気がしますね。それで、会社の方に届け出して、そして翌日社長室に呼ばれて、「もう首かな」と思ったんですけど、ありがたいことに行く部署は用意してくれているということで。ただ社長も役員も、ここのところずっと「おかしいな」と思っていたはずなんです。それで、まあとにかく激務じゃない部門から、「楽にさせろ」ということで本社部門にいきまして、そこへ行くにあたって、今までちょっとパソコンまではできていたんですけど、ブラインドタッチを覚えなきゃいけないじゃないですか。

それがもうできなかったものですから。じゃあどうするかということ、それで視覚障害者の自立支援を助けるところがありましたものですから、そこに会社の方から半年休職させてもらいまして、そこで通って会得したりということであんなにか職は繋がった。その時はほっとしましたけどね。

(2016 年 10 月 4 日:B さん)

B さんが示す喪失の語りは、「視機能」が奪われることではなく、「失業」という現在の職を失うことへの不安によって大部分が構成されている。このことは、これまでに挙げたどのパターンにも見られない壮年期特有の語りであることは明らかだろう。また、すでに結婚し子どもがいるという B さんにとって、失業の不安は家族全体の生活を危うくする事態として重く受け止められていたのである。一方、こうした B さんが「ありがたいことに」と感謝の意を表明するように、何よりも強い影響を与えたというのが「会社の上司」の存在であった。現在、会社の一員として「やれている」という実感が何よりも大事だと話す B さんは、復職した初日「会社にどう顔向けしたら良いか」と非常に不安だったと当時の心境を語った。しかし、音声パソコン等の機材の設置、果ては困ったときには何でも手伝ってくれるという職場環境の整備や柔軟な移動の支援、加えて復職後の第一声が「おかえりなさい」という発言であったことに心底嬉しかったという B さんは、それまでの職業生活を通じて築いてきたアイデンティティを回復し、周囲の援助を得ながら再び職業生活を過ごしていているという。

こうした社会人としてのアイデンティティを回復する過程は、白杖を積極的に利用することと強く連動する。「障害者として見られることで一人前（の社会人）として扱われないのではないか」という B さんの白杖利用開始当時の心境には、白杖を利用することによってこれまで築き上げてきた社会人としての尊厳が失われてしまうのではないかという不安が強く伴っていた。しかし、肯定的な職場環境を通じて新たに社会人としての自分を再スタートできたことによって、視覚障害者としての自分をひとつの「個性」として受け入れられたのだという。この語りと並行して、「自分は知られたくなくても周りは知っているんだから」と繰り返し認識の変化を強調し、白杖が積極的に利用できていったことを説明した。

5. 考察—「重要な他者」の機能

前節では、大きく「学齢期終了前」と「学齢期終了後」に分けながら、調査対象者が語る喪失経験と、同時にそうした状況を好転させる「重要な他者」を確認した。では「重要な他者」は、中途視覚障害者の白杖利用にどのような機能を果たしていたのだろうか。前節までのデータに依拠し、本節ではこの点について整理しておきたい。

5.1 「重要な他者」が果たす多様な支援機能

前節の整理によって明らかになったのは、中途視覚障害者の「重要な他者」には少なくとも5つの存在——①病院の医師・看護師，②学校の教師，③盲学校の教師・友人，④訓練指導員，⑤職場の上司・同僚，がありうることである。こうした存在は、中途視覚障害者に対してどのような機能を有していたのだろうか。職業人としての成長という観点から「重要な他者」の機能を整理した伊藤・岡部^[12]によれば、「重要な他者」がもたらす機能には4点——「支援機能」，「同朋機能」，「モデル機能」，「対立機能」が示されている。しかし、中途視覚障害者にまつわる「重要な他者」の多くが障害受容や白杖の積極的な利用に結びついていったという豊かな支援のあり様に照らせば、既存研究で指摘されている「支援機能」はその内容に即した再検討が必要である。とくに、これまで明らかにした「重要な他者」が中途視覚障害者に与えてきたポジティブな影響を考慮すれば、そうした支援の実態を踏み込んで整理する作業は今後の中途視覚障害者に対する支援のあり方を考察する参照点として重要な意義を果たすと考えられる。

以上の見地から、本稿では「重要な他者」が有していた様々な支援機能を横断的に比較考察し、その機能の内実を「介入型支援機能」と「環境型支援機能」の二つに概念化した。その内容は、前者がとりわけ「個人」に向けてピンポイントで行われる支援機能であるのに対して、後者は「集団」が有する副次的な効果として作用する支援機能としてそれぞれ定義できる。それぞれの機能の内訳を示したものを表2に記載した。

表2 「重要な他者」の支援機能と詳細

機能大別	介入型支援機能	環境型支援機能
機能内訳	ガイドライン	学習促進
	ネットワーキング	情緒的安定
	学習・生活支援	相互承認
	情報提供	環境調整

両者の違いとして説明しておきたいのは、それぞれの機能は「中途視覚障害者となった・なることがわかった」段階でさしあたり便宜的な区別が可能ということである。すなわち、診断直後の一個人に対して行われる介入型支援機能と、診断以降、医療機関や教育機関、就労支援機関や会社といった集団のなかで付随的に発揮されていく「環境型支援機能」である。もちろんこれらの機能は、相互に独立した関係にあるわけではなく密接に関係して

いる。とくに、介入型支援機能が初期支援としてのみ行われるというよりは、それらが継続的に行われる方が有効だと考えられる。しかしここで強調しておきたいのは、前節までで検討した調査対象者が出会った「重要な他者」がどのような機能を有していたのかということである。

まず、本稿が扱ったデータから指摘できるのは、「中途視覚障害になる・なった」ことをめぐって半ば途方に暮れ、また視覚障害者コミュニティから隔絶されていた初期段階で効力を発揮していた介入型支援機能の強みである。例示するならば、初期の診断にかかわっていた医療機関が今後の生活設計を直接指南していた「ガイドライン機能」や、点字学習を院内で行ったり生活の仕方を学んでもらったりという「学習・生活支援機能」。また、別の視覚障害者と引き合わせるといった学校教師による積極的な「ネットワーキング機能」や盲学校を含む様々な進学先の内容を具体的に提示するといった「情報提供機能」が挙げられる。初期の喪失経験に対する語りの違いはあれ、これらはいずれも調査対象者たちが様々に障害を受容し、また白杖利用へと結びついていった初期支援の内実とその重要性を示しており、今後も中途視覚障害者に対する支援の方向性を検討する際の参照点として非常に重要なものと指摘できるだろう。

一方で、「環境型支援機能」は、そうした彼らがライフコースを形成していったり、自立した社会生活を築いていったりする際に無視できないものである。具体的に言えば、将来展望が挫かれるなか、盲学校での友人を通じて心理的な回復を図る「情緒的安定機能」、そこでの関係を通じて白杖利用の仕方や生活の知恵を伝達し合ったりする「学習促進機能」、また、視覚障害者であるという事実を個性として捉え、社会人としてのアイデンティティを繋ぎ止めたりステレオタイプな視覚障害者イメージからの脱却を図る「相互承認機能」、そして仕事上の困難を取り除いたり就労継続に結びつくような会社内での「環境調整機能」は、いずれも本研究のデータから説得力をもって提示できるものである。では、そうした機能を有していた「重要な他者」とは誰なのか。続いてこの点についての整理を調査対象者横断的に整理していこう(表3)。とくに受障の「時期」に応じた支援のあり方として、どのような「重要な他者」との相互行為が重要になるのかを表3で示した整理をもとに考察しておきたい。なお表3は、インフォーマント全員を横断して確認された「重要な他者」の機能を一覧にしたものであり、該当する機能には丸印を付している。

表3 初期の「重要な他者」に該当する機能一覧

		介入型支援機能				環境型支援機能			
		ガイドライン	ネットワーキング	学習・生活支援	情報提供	学習促進	情緒的安定	相互承認	環境調整
医療機関		○		○	○	○	○		
教育機関	学校		○		○			○	○
	盲学校	○	○	○	○	○	○	○	○
就労支援機関		○		○	○	○	○	○	○
会社					○			○	○

5.2 中途失明の時期に応じた支援のあり方

総じて明らかなのは、中途失明を経験した場合には、まず医療機関が全般的に重要な役割を果たすということである。

本稿では十分な検討は加えていないものの、調査対象者の中には「診断をされたらそれで終わりだった」というドライな扱いをされたという事例も存在する。しかし医療機関は、中途失明が具体的にどのように進行するのか、それはどのくらいの期間を要するのかといった症状面での基礎的かつ非常に重要な情報を提示することを通じて、中途失明者の「障害の受け止め方」を最も強く規定するポイントとなっている。この点から、医療機関を「重要な他者」に挙げた回答者が具体的に語るように、初期支援として情報提供が行われたりガイドラインとして今後の生活設計のあり方を模索したりする役割を担う立場として、介入型支援機能をもつ医療機関の意義は決して過小評価することはできない。さらにインタビューデータからは、入院生活を通じて点字学習を行い（＝学習促進）、障害受容を促す様々な他者との交流を保障する（＝情緒的安定、相互承認）といった複数の機能——環境型支援機能の存在が確認された。こうした複数の機能は、「学齢期終了後」の回答者からとりわけ重要視されていたが、医療機関がもつ意義は「学齢期終了前」に中途失明を経験した中途視覚障害者についても強く妥当すると考えられる。この点で、医療機関全般が果たす役割は強調してもし過ぎることはない。

次に、学齢期段階に注目したとき、重要性を帯びていたのが、(盲)学校という教育機関の存在である。もちろん盲学校としての性質を有していない一般の義務教育機関において、教師たちは視覚障害者がどのような点に困難を抱えているのかはもちろん、そもそも「視機能」にどのようなバリエーションがあるのかといった基本的な知識を備えてはいなかった。しかし、教育機関を「重要な他者」に挙げた調査対象者が示したのは、実際に中途失明を経験した他の中途視覚障害者との接点を確保してくれたり（＝ネットワーキング）、今後の将来展望を再構築するにあたって尽力してくれたり（＝情報提供）といった介入型支援機能の重要性であった。これは、将来展望がはっきりとしていた調査対象者にとっては有効に働き、とりわけ「将来的にどのような仕事に就くことができるのか」「どのような学校に通うべきか」といった進路選択にかかわる様々な知識獲得の契機を意味していた。こうした文脈が一体となり、学校の教師は生涯をかけての「恩師」として高く価値づけられていたのである。このことは、盲学校（＝特別支援学校）に関わる知識理解を排除するのではなく、むしろ「誰もが（視覚）障害者になりうる」という認識をもつべきことを現代の学校教育に改めて要請する。本研究で扱ったモデルケースを立脚点としながら、学校現場には特別支援学校が有する様々な知識を相互に共有していくことが課題として指摘できるだろう。

なお、実際に盲学校へと進学した後は、そこでの教師

や友人たちがあらゆる側面に関わるという全方位的な支援を行っており、学齢期における視覚障害者コミュニティの存在は、当事者に障害受容や白杖の積極的な利用に結びつく共通した要因として語られた。それだけでなく、盲学校への帰属は同じ当事者同士のネットワーク形成を保障し、今後、自立した生活を築けるよう機能してもいたのである。「学齢期終了後」に中途失明を経験したインタビュー対象者についても、盲学校へと足を運んだという事実は同様の影響力をもっていたことが繰り返し言及されており、自立した社会生活を営むにあたって盲学校が持ちうる支援体制とその機能面での充実さは今一度重要なものとして認識される必要があるだろう。

なお、学齢期を終えて中途失明を経験したインタビュー対象者すべてが盲学校に通えるわけではない。とくに社会人経験を有していたり、就職を間近に控えていたりするという段階においては、長期的に教育機関に通うことが困難になる可能性が高い。そのとき、教育機関に代替する機能を備えた「重要な他者」が、訓練指導員に代表される就労支援機関の存在であった。本研究で扱ったインタビューデータからは、就労支援機関は盲学校と変わらないほど豊富な支援機能を有していたのであり、その場への帰属を通じて障害受容に結びつき、白杖の積極的な利用が選り取られていったことを再度確認したい。

しかしここで注意を要するのが、会社という場への理解である。壮年期に中途失明を経験し、積極的な白杖利用を行っていると回答した調査対象者は、中途失明に対する会社側の配慮として就労支援機関への斡旋が行われていた。また復職後には、中途視覚障害者であることを白眼視することなく「個性」として承認していただけでなく、働きやすい就労環境を積極的に整備するよう構えていたことが特筆できる。無論、本研究において、壮年期に中途失明を経験した事例は1ケースにとどまったため、こうした措置をあらゆる会社が採用しているとは限らない。しかし、広く視覚障害者と企業体制の関係を見据えたとき、当事者が「会社の一員としてやれている」という復職時の感覚が職業人としてのアイデンティティとその回復を図るうえで非常に重要であったことを踏まえれば、どのように会社側が合理的な配慮を行っていくかが社会的な課題として強く要請される。もちろん、本事例では「第一線で活躍していた管理職」であったために、会社側が解雇を躊躇して代替案を模索した結果、支援機能が作動していったとも考えられる。しかし白杖を積極的に利用できるようになったというプロセスに注目したとき、中途視覚障害者を排除しない企業体制とそこでの支援のあり方を考察するものとして本事例は位置づくと考えられる。

本研究では「重要な他者」が障害受容や白杖利用に結びついていることを示したが、それぞれの機関が果たす機能を相互共有することを通じて、どの時期に中途失明を経験しても社会から排除されないよう、支援の網の目を拡大していくことが肝要だと指摘できる。

6. 知見の要約と今後の課題

最後に本節では、本研究が明らかにしてきた知見を要約するとともに、今後の研究課題を整理しておきたい。

まず本研究の第一の研究課題であった「障害受容のプロセス」については、複数の「重要な他者」の存在によって達成されていくことが明らかになった。本稿で示したのは、①医療機関、②教育機関、③就労支援機関、そして④会社、という複数のフィールドで出会う他者の存在である。そのことは、中途失明を経験する「時期」に関わりなく見出せるものであり、「白杖を利用することに抵抗感はない」という調査対象者に共通する要件を浮き彫りにしたといえるだろう。

次に、第二の研究課題に即して言えば、白杖利用との関連において顕著な影響を与えていたのが当事者コミュニティへの帰属であったと整理できる。当事者コミュニティは、「健常者を排除する空間」という性質が強かったものの、同じ中途視覚障害者のネットワークを獲得することの意義は全員に共通して言及されていた。その一方で、本研究が強調したい最大の知見は、当事者コミュニティが白杖利用の促進に作用する仕方には、大きく二つのプロセスが明らかになった点である。主に学齢期終了前に中途失明を経験した場合は、将来展望が挫かれるといった「喪失経験」からの回復の場として作用し、当事者コミュニティの一員として「同化」を果たすことによって白杖利用の抵抗感は消失していく傾向にあった。それに対して、就労支援機関を通じて得た当事者コミュニティへの帰属をめぐっては、それまでに培われた視覚障害者に対する否定的なイメージを捉え直すよう作用し、多様性のある視覚障害者集団として「異化」する作業を通じて、抵抗感の強かった白杖利用は見直されていったのである。つまり本研究からは、当事者コミュニティへの帰属をめぐる「同化」と「異化」の作用を通じて、白杖の積極的な利用には分岐が生じることが示された。

こうした分岐が生じる背景には間違いなく世代差——青年期や壮年期にかけて培われてきた日本社会の「視覚障害者イメージ」が強く影響を与えていると考察できる。そしてこのことは、「効果の実感」を獲得していくことで白杖利用のプロセスが促されるという仮説に再考を促すべきことを示す。つまり、「効果の実感」が達成されるプロセスは一枚岩ではなく分節的であり、当事者コミュニティへの帰属のあり方という視点も踏まえた検討が必要になることを示している。この点についての踏み込んだ仮説検討については別稿の課題としていきたい。

参考文献注

- [1] 社会福祉法人日本盲人会連合 HP (2017年1月6日最終閲覧)
<http://nichimou.org/impaird-vision/life/initial-consultation/>
 [2] 関喜一, 視覚障害者のための音による空間認知の訓練技術: *Synthesiology*, 6(2), pp.66-74.(2013).

- [3] 山下清司・長谷川孝明, 視覚障害者誘導用ブロックを用いた M-CubITS 歩行者ナビゲーションシステムについて: 電子情報通信学会論文誌 A, 88(2), pp.269-76. (2005).
 [4] 久保明夫, ロービジョンクリニックにおける心理・社会的相談と社会適応技能訓練: 日本眼科紀要, 50, pp.917-22.(1999).
 [5] 山田幸男, 高澤哲也, 平沢由平他, 中途視覚障害者のリハビリテーション第 6 報—視覚障害者の心理・社会的問題, とくに白杖, 点字, 障害者手帳, 自殺意識について—: 日本眼科紀要, 52, pp.24-9. (2001).
 [6] 岩井阿礼, 中途障害者の「障害受容」をめぐる諸問題—当事者の視点から—: 淑徳大学総合福祉学部研究紀要, 43, pp.97-110.(2009).
 [7] 上田幸彦・津田彰, 中途視覚障害者の心理社会的問題と介入法—主な理論・研究と結果—: 久米大学文学部心理学科・大学院心理学研究科紀要, 4, pp.71-88.(2005).
 [8] Carrol, T. J., *Blindness: What it is, what it does and how to live with it*, Boston: Little, Brown and Company. (1961).
 [9] 高田明子, 中途視覚障害者の“白杖携行”に関する調査研究: 社会福祉学, 43, pp.125-136.(2003).
 [10] 藤咲淳一・幸田のみ子・中里克治, 視覚障害者が白杖を使用することの心理的困難さに関する研究: 東京福祉大学・大学院紀要, 4(2), pp.105-114.(2014).
 [11] Blumer, H. G.: “*Symbolic Interactionism*, Prentice-Hall”, (1969) 後藤将之訳:「シンボリック相互作用論」, 勁草書房, (1991).
 [12] 伊藤匡, 岡部大介: 「対人認知過程に状況要因が及ぼす影響—どのような人が『重要な他者』と認知されるのか—」, 横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター紀要, 3, pp. 77-98(2003).

(原稿受付 2017/01/10, 受理 2017/3/31)

*坪田光平 (博士・教育学)
 職業能力開発総合大学校, 能力開発院, 〒187-0035 東京都小平市小川西町 2-32-1 email: tsubota@uitec.ac.jp
 Kohei Tsubota, Faculty of Human Resources Development,
 Polytechnic University of Japan, 2-32-1 Ogawa-Nishi-Machi,
 Kodaira, Tokyo 187-0035

*安房竜矢
 職業能力開発総合大学校, 能力開発院, 〒187-0035 東京都小平市小川西町 2-32-1 email: awa@uitec.ac.jp
 Tatsuya Awa, Faculty of Human Resources Development,
 Polytechnic University of Japan, 2-32-1 Ogawa-Nishi-Machi,
 Kodaira, Tokyo 187-0035

*駿河厚希
 職業能力開発総合大学校, 総合課程・電子情報専攻, 〒187-0035 東京都小平市小川西町 2-32-1 email: ptu.suruga@gmail.com
 Koki Suruga, Polytechnic University of Japan, 2-32-1
 Ogawa-Nishi-Machi, Kodaira, Tokyo 187-0035

注

[注1] ここで挙げた「訓練指導員」とは、歩行訓練士 (Cさん), 自立支援員 (Eさん) を包括した「総称」として用いた。